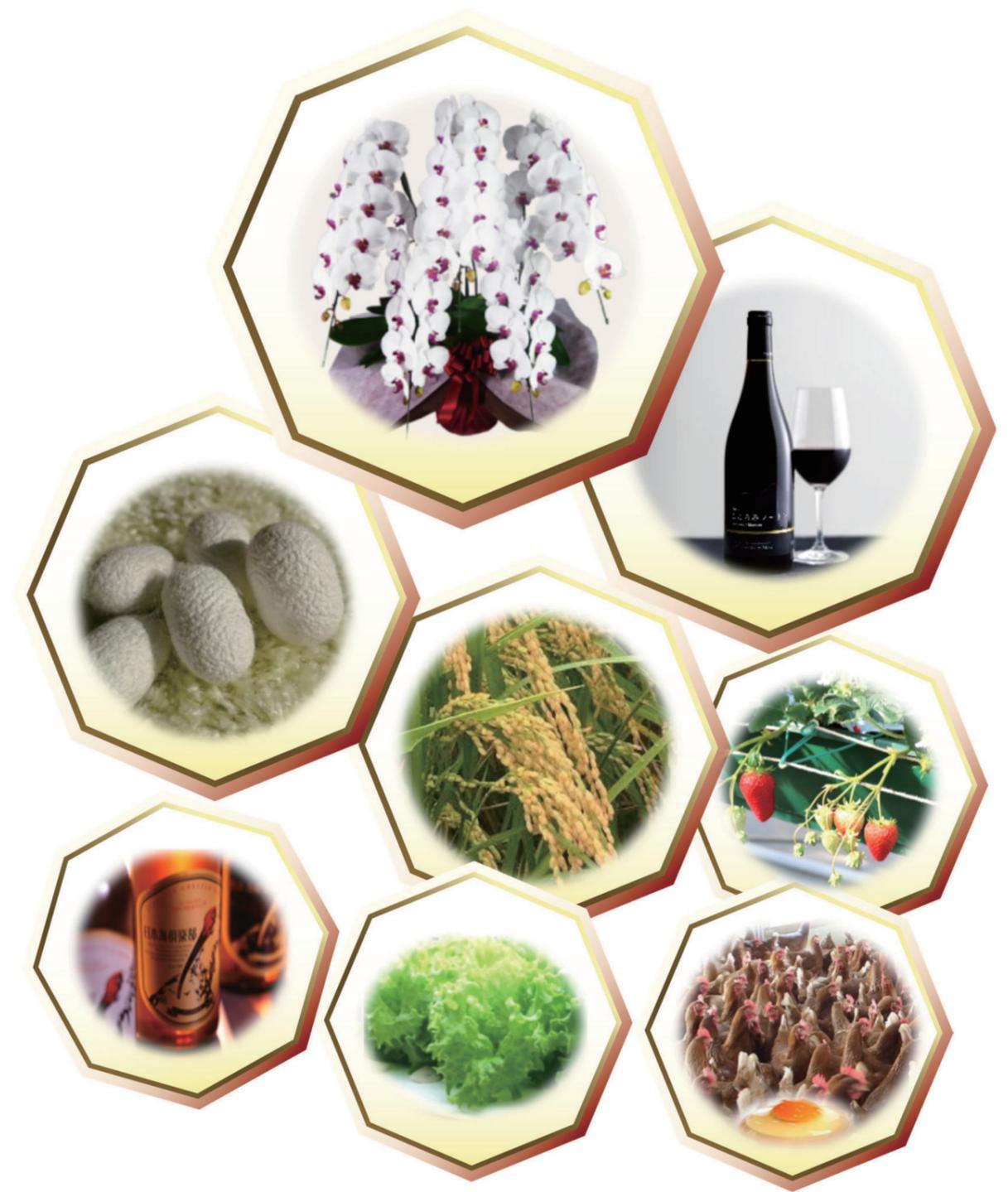




全知P連だより

No. **12**



【NPO 法人 AlonAlon】
 胡蝶蘭の栽培・販売を行っています。
 胡蝶蘭の苗から開花・仕立て・出荷まで一連の作業を細分化し、各利用者の特性や経験に応じた作業分担がされています。



<https://www.alon-alon.org/>

【ココ・ファーム・ワイナリー】
 1950年代に特殊学級(現在の特別支援学級)の中学生たちによって開墾された葡萄畑がワイン造りの原点。
 ワインは2000年、2008年のサミットでも使用されました。



<https://cocowine.com/>

【パーソル サンクス】
 人材会社の特例子会社です。養蚕事業は富岡市が支援や協力をし、パーソル サンクスが雇用した障害者によって桑園管理から蚕の飼育、和紙作りなどを展開しています。



<https://www.thanks.persol-group.co.jp/>

【社会福祉法人 無門福祉会】
 自然栽培による米、野菜づくりなどの他に、紅茶店での接客・調理補助をはじめ、スイーツづくり、椎茸の栽培・出荷と、生活に欠かせない「食」に関する仕事で働きがい支援しています。



<http://www.mumon-fukushi.net/>

【社会福祉法人 元気村 夢工房翔裕園 「元気ファーム」】
 「いちご」や「ブルーベリー」を栽培しています。いちご農園はハウス内で高設栽培し、子供からお年寄り、障害のある方も楽な姿勢でいちご狩りが楽しめます。



<https://www.genkimuragroup.jp/genkimura/genkifarm/>

【日本海倶楽部】
 ビールづくりは麦芽や酵母などの材料搬入・醸造・瓶洗浄・充填・出荷といくつもの工程があるため、チェコ人のブラウマイスターや専門のスタッフと共に本物のビールづくりに励んでいます。



<http://www.nihonkai-club.com/index.shtml>

【NPO 法人 ソーシャルハウス】
 水耕栽培での野菜作りから販売を通じた就労経験と、日常生活を送るために必要な自立訓練を半日ずつ行う、生活支援サービスを提供しています。種まき→植え替え→収穫(7日間)



<http://www.social-house.jp/about>

【社会福祉法人 こころん】
 こころん鶏の平飼い卵(ここたま)をはじめ、扱う品目は約50種類。自家製堆肥による土作りや温床を用いた苗作り、無農薬での野菜作りに取り組んでいます。



<http://www.cocoron.or.jp/farm>

<いま、伝えたいこと> **令和2年度 文部科学省への予算要望書について**

要望書は上部団体の全国特別支援教育推進連盟を通して提出しています。詳しくは全知P連HPに掲載しています。

平成29年4月に公示されました特別支援学校学習指導要領等において、学びの連続性を重視した対応や一人一人の障害の特性に応じた指導上の配慮の充実、自立と社会参加に向けた生涯教育などがうたわれ、障害のある幼児児童生徒の持つ力がより伸長し、可能性が最大限に広がることに大きな期待を寄せています。共生社会の実現に向けて特別支援教育がさらに発展し充実したものになりますよう、以下の事項につき要望いたします。

1. 合理的配慮の基礎となる環境の整備
2. インクルーシブ教育システム構築のための条件整備
3. 学校と福祉機関の連携
4. 特別支援教育における教職員の専門性の向上
5. 高等学校における通級による指導の更なる推進と周知
6. 障害者スポーツの振興体制の強化
7. 特別支援教育の生涯学習の充実
8. 大規模災害時における対応

<お詫び>
 2019年9月10日発行の会報「明日を拓く85号」の内容に誤りがありました。訂正し謹んでお詫びいたします。
4ページ (誤)茨木 →(正)茨城

<編集後記>
 今回の紙面作成にあたりパソコンで数々の検索をかけました。「農福連携」と「障害者雇用」「困りごと」「支援」「配慮」。調べていくと「農業」という文字の幅広さを実感しました。表紙の品々が農福連携から生まれていることも知り、このページで紹介してみました。URLやQRコードを使って、さまざまな取り組みをぜひ、覗いてみてください。(K・N)

「農業」と「福祉」が一体となって

行われる取り組み

農福連携



注目の農福連携

全知P連 第20回全国役員・都道府県代表者連絡協議会 研修会ではテーマを「農福連携について考える」とし、知ることから始めました。



全国特別支援学校知的障害教育校PTA連合会 会長

木村 加代子

農福連携とは、高齢化が進む農業分野で障害者が働き手となり社会参画を実施する取り組みのことで、近年では各地域の実情に即したさまざまな取り組みが展開されています。障害者の活躍の場が広がることに喜びを感じるものの、はたして障害者にとって働きやすく、やりがいを感じられ、持続的に取り組める(就労定着)ものなのかという不安もあります。

雇用する体系は民間の農家から法人、特例子会社など、あらゆる想定がなされています。その中で、雇用する側の障害理解は十分なのか、農業版ジョブコーチの育成は構築できるのか、障害の特性に合わせた作業工程の細分化は可能なのか、工賃の水準はどの程度なのか。農業と福祉、双方の意識を高められるような特別支援学校での農業実習など、教育支援は実際にどのように行なわれてゆくの。只々、世論の流れに乗ることで障害者の大事な就労経験が農福連携の試験的的就労とならぬよう、保護者として国の動きを知っておくことはとても大切だと思います。

省庁横断の会議として農福連携等推進会議(第1回・2019年4/5、第2回・6/4)も開催されました。会議では農福連携を強力に進めていくための3つのアクションを盛り込んだ「農福連携等推進ビジョン」が決定されました。<首相官邸ホームページに掲載>

農福連携は、農業の「働き手の確保」と障害者就労の「職域の拡大」というところに止まらず、すべての人が地域で豊かに暮らしていける地域共生社会の実現に向けた取り組みとなることが重要と考えています。

● 行政説明資料より

農福連携推進ビジョン

ビジョンの概要

<ビジョンにおける特別支援学校関係の記述>

- 地方公共団体内の農福連携担当部署と教育担当部署との連携の強化や特別支援学校と農業経営体等との連携を推進し、特別支援学校における農業実習の充実を図る。
- ハローワーク、障害者就労施設等、特別支援学校、農業法人等において連携強化を図り、農業分野での障害者の雇用増加を推進する。

来年度概算要求に向けて農業実習の充実に係る対応策を検討中

なぜ今なのか？

農福連携がなぜ今、注目されるのか。障害者と農家双方に得られるメリットとは何か、講師 滝坂先生のお話からみんなで考えてみました。



独立行政法人国際協力機構技術顧問

滝坂 信一 先生

2019年現在、日本のカロリーベースでの食料自給率は37%と、先進諸国の中でも非常に低い値です。もし長期間輸入が止まったら、私たちは飢餓の状態になってしまうでしょう。さらに、農業分野では高齢化が進んでおり、人手不足・後継者不足が深刻な状況にあります。他方、障害のある人たちの社会参加については、自立支援、就労支援等、さまざまな体制が整ってきてはいるものの、地域の中であたりまえに暮らすためには、さらなる取り組みが求められています。特に、障害のある人たちが社会で活躍できる場と機会が必要です。このようななかで、農業と福祉双方の分野の課題を解決する策として期待されているのが「農福連携」です。農福連携という考え方が広まり始めたのは2016年頃からです。政府が定めた「ニッポン一億総活躍プラン」(2016年6月閣議決定)において、「社会的に弱い立場の人々が最大限活躍できるような環境整備の一環」として「農福連携の推進」が盛り込まれました。農福連携の展開には、二つの大きな目的があります。一つは、障害のある人たちが社会参加をしていく・仕事をしていく場を農業の中で広げていくということです。もう一つは、農福連携の推進により、持続的な農業生産が確保され、日本の食料自給率を上げていくことです。

農福連携事例

農福連携へのアプローチの仕方は、いろいろな形があります。

ひとつの事例として、「パーソルサンクスよこすか・みうら岬工房」を紹介します。ここは横須賀市と企業との連携協定によって設立された特例子会社で、障害のない社員の方7人、障害のある社員の方11人が働いています。いくつかの農家と契約をし、農家の求める仕事内容と障害のある人たちのそれぞれができる仕事を組み合わせ、障害のある社員を農家に派遣するという活動を展開しています。私が先日、見学に行きましたら、特別支援学校の生徒たちが社員の方に混じってイチゴの苗の間に黒いホースを通す作業の実習をしていました。ホースから出る炭酸ガスを苗にあてることによって苗の発育を促すことができるのだそうです。別の場所では、社員の方々が、収穫されたかぶを洗浄して出荷する作業をしていました。

石井農園のかぶ洗浄作業で気を付けること！



コンテを移動する際にカブをぶつくと カブが傷つき、出荷できなくなります

カブのあつかいには気を付けましょう！

→
掲示を見て
洗い終わった
「三浦カブ」



「農福連携等推進ビジョン」(農福連携等推進会議、2019年6/4)によれば、農福連携は、障害のある人、高齢者、生活困窮者、引きこもりの状態にある人、犯罪・非行をした人等の就労、社会参画に対する支援として取り組まれることが必要だとしています。また、経済界にはSDGs(「持続可能な開発目標」)の中に位置づけて取り組むことを求めています。

SDGsは2030年までに持続可能でよりよい世界の実現を目指す、分野別17のゴールと169のターゲットから構成される目標です。「誰ひとり取り残さない - No one will be left behind」を理念に、インクルーシブな社会を創るという取り組みでもあります。農福連携はこのなかに位置づけられ展開されていくことが重要なポイントだと思います。

【※SDGsとは、2015年9月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟国193か国が2016年から2030年の15年間で達成するために掲げた持続可能な社会の開発目標】
(参考) 国際連合広報センターホームページ：
https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/

● 研修会資料より



農福連携への期待

「農業」という分野は、野菜を作ること、果実を栽培すること、蚕を育てること、鶏を飼うこと、ミツバチを育てること、植樹、花を育てること、土をつくること、屋上緑化、都市緑化(街路樹)など、その内容はとても多岐にわたり豊かです。さらに、加工や販売といったことを組み合わせることができます。農業と福祉双方の分野と一緒に、障害のある人たちの仕事の創出や農業の人手不足の解消などを旨とする「農福連携」の取り組みが広がることを期待します。研修会2日目では、ワークショップを行い、「こんなことができたらすてきな」というアイデアなどを全知P連HPに写真で掲載しています。

情報

研修会において、アシスタントを務めてくださいました関根 健一 様(埼玉県富士見市立富士見特別支援学校元PTA会長)が、映画「お百姓さんになりたい」に出演しています。映画の中では、お嬢さんが特別支援学校の「産業現場等における実習」(現場実習)として、農業体験をしています。

